

# サルカの戒め 蘆原英了

若い人たちの中には、勉強するきっかけがないままに過している人たちも多いようです。だから、我々の先輩にあたる人々がどんなに勉強家だったかということをよく知っていない。

劇作家の小山内薫は私の母のいとこですが、死んだ時ひとつおどろいたことがある。机を片づけたら、机の下から単語帳が出てきた。その単語帳に随分書きこんであるんです。これは説明しなくてはわからないが、当時、昭和の始めまでは、ウェブスターの発音記号を使っていた。我々が中学生時分だったけれどその頃にあの三省堂のコンサイスがでて、ホネティックサイン（今の記号）に変わ

はじめたわけです。小山内薫の長男が、中学生になって、ちょうどこの頃亡くなったのですが、薫は息子のテキストで、このホネティックサインを見て、彼はウェブスター記号で学んでいるから、それがわからない。ところが薫は誰にも知られないうちに、もう随分えらい人なんだけれど、ホネティックサインを学びはじめたんですね。彼は急死といっているに方だったのですが、その単語帳のことは死ぬまで誰も知らなかった。最後まで勉強していたんです。

最近、鎌倉の里見淳さんの家を訪れた。里見さんは79歳ですよ。ご近所に日本画家の嫡木清方さんがいらっしやる。清方さんは85才

です。里見さんは勉強家として有名だけれど、ある朝、寄贈を受けた本のお礼をのべようと、散歩のついでに清方さんを訪ねられた。ところが、清方さんはもう画室へ入っていられた。里見さんが帰ろうとされたら、出てこられたというが、清方さんは、85歳で毎朝8時に画室へ入り、四時間描く。里見さんは勉強家だけれども、それでも「自分も内心はずかしいような気がしたよ」といっておられた。勉強といっても、それをつづけるのは努力以外の何物でもないのだが、立派な人ほど、努力をしつづけるといふことですね。

文化勲章をもらった林武さんと、この前インタービューして、いろんな話をした。私の母の一番下の弟が、いまパリにいる藤田嗣治です。その話を林さんにした。藤田は今でも一日六時間から八時間、絵をかく。朝、食事しながら、その日きた手紙を整理してしまいうちに画室へ入って、午後までずうっと描きつづける。

そういう話を林さんにしたら、林さんは、「やっぱり、おれの方が足りない。あすから寝るのを二時間へらすよ」といった。林さんの見事さがわかるでしょ

う。

藤田の話など聞くと、ピカソはね、ほとんど一日中描いている。偉いという人を見てみると、とにかく70だって、80だって、ピカソなんかもう90に近いんですよ、そういう人が非常にやる、努力しつづけているということね。そして当りまえの顔をしている。

藤田嗣治なんか、おととし、ランスのカテドラル（教会）の壁画を全部描いた。79歳で、やぐらを組んで、助手も使わず、全部自分で描いた。ヨーロッパの教会というのは、日本で考えているほど小さくないんですよ。それを、全部描いた。

体力ということよりも、その努力です。努力しつづけるから、強い意志もある。

だから、天才とひとくちに我々はいうけれど、結局、それだけたえず一生努力しつづけることのできる人、それが天才とよべる人じゃないかということがいえるわけです。

山のぼりに例をとっても、われわれなら、休んだり食事をしたりして、そしてまた登る。ところが、木こりは足はずっとおそいけれども、止らずゆっくり上る。そしてわれわれよりはるかに早く頂上に達している。止ら

ないということが、早くつくことです。人生でも休憩しないこと、それが偉大への道ですね。

若い人は、そしてとにかく歩きはじめなくてはならない。努力しはじめなくちゃならない。若いときには、いろいろな怒があって、なかなか一つの方向に（勉強に）向かないものです。

私なんか、学校を卒業してすぐパリへ行った若い頃はそうでした。あの時分「サルカ」というネクタイがあった。フランスでは「ジュルカ」と発音しています。日本だと、それが60円から100円した。当時の帝大卒の給料が75円、早稲田・慶応卒なら60円という時代のことですよ。パリではそれが40円で買えたので、うれしくてすぐ二本買ったのです。

それからロシア人の舞踊の方の先生とピポニ一通りを歩いていて、その話をした。すると「お前はいいたい誰のお金で何しにきているのか」というのです。

「親のお金で勉強にきている」というと、

「それじゃああなたは心得ちがいだ。この

サルカというのは、世界中の金持、パリへやってきて買うものだ。あなたにはそのドロアがない。」

ドロアーというのはフランスでは「権利」のことです。

「あなたが今、親の金でここへ来て勉強して国へ帰り二、三十年経って、それであなたが日本の国で指導者になって、その後パリへ来て自分の金で買うならわかる。今学生のように親のお金で勉強しにきて買う権利はない」というわけです。

その時はピンときたわけではない。しかし今になってわかる。ヨーロッパでは、勉強という点では、かなりきびしいけじめの伝統があるんですね。そういうけじめのようなものが、早くわからなくてはならないということです。勉強をはじめた人が、はやくそれに気づくことです。

（談・文責編集部）

×

×

×